

ごん吉くんレポート

～南吉よもやま話～

第53回

児童雑誌『カシコイ小学生』と新美南吉②

新美南吉記念館で開催中の企画展「児童雑誌『カシコイ小学生』」に集った作家と新美南吉②(12月20日まで)から同誌に集った作家と挿絵原画についてご紹介します。

*

東京神田神保町にあった精文館が刊行していた『カシコイ小学生』。当館にとっては南吉作品が掲載されていたという点で大切な資料ですが、もう一つ注目すべきは同誌に集っていた作家です。児童文学界で三種の神器と呼ばれた浜田広介、坪田譲治、小川未明。そして『赤い鳥』『ドモクニ』など子ども向けの雑誌で優れた童謡を発表していた北原白秋に、挿絵を描いていた鈴木寿雄や前島とも。人気雑誌『少年倶楽部』で漫画を連載していた中島菊夫など各分野で活躍していた人ばかりです。読者である子どもや実際に購入する親たちの心を掴むのに十分な布陣といえるでしょう。大手ではない精文館がどのようにしてこれだけの人たちを集めたのかは分かっていません。

中島以外は『ドモクニ』でも活動しており、白秋は『カシコイ小学生』と両方で顧問を務めていて、南吉を始め異聖歌や與田準一ら白秋門下も両誌に作品を発表していました。『カシコイ小学生』の編集者、渡辺哲夫も『ドモクニ』に作品を出しています。南吉が精文館で渡辺に紹介された『ドモクニ』の編集者、和田古江も、元は『ドモクニ』の編集者で『カシコイ小学生』の中にその作品が載っています。師弟関係、作家、編集者仲間の人脈で築かれた布陣とも想像できます。南吉は精文館で渡辺に浜田広介を紹介してもらっており、広介の印象を「鉄砲玉のようにかりつとしていてすぎがない」としながら、自分に対する反応がそつけない「なさけない思いがした」と日記に書いていますが、学生だった南吉には得難い経験だったのではないのでしょうか。

精文館が、まだ学生だった南吉の作品にも稿料を払っていたこと、同社主催の忘年会を開いて作家たちを労っていたことなど、彼らが気持ちよく創作に励めるように支え、『カシコイ小学生』は刊行されていたのです。当館では、平成23年に『カシコイ小学生』25冊を精文館の創業者遺族から譲っていただき、それを以降、同誌の掲載作品について関係各所の協力を得ながら調査・記録を行ってきました。広介の代表作「泣いた赤おに」が「おにのそうだん」というタイトルで掲載されていたことが分かったり、白秋、未明、坪田らの全集未掲載作品や初出未詳の作品が見つかるなど多くの収穫がありました。

平成30年には、同誌の挿絵原画百点が見つかりました。精文館の関係者遺族が保管していたもので、遺族が改めて調べてみたところ鈴木寿雄や前島とも等の手によるものであることも分かりました。描かれて80年以上経っているとは思えない色鮮やかな原画からは、毎号子どもたちのために描き続けた画家らの思いが伝わってくるようです。

新美南吉記念館 小栗真子



▲『カシコイ二年小学生』昭和8年8月号「おにのそうだん」第1回

みなさんの(声)を聞かせてください アンケート

- Q1 今号でよかった内容や写真があれば教えてください。
- Q2 今号を読んだことがきっかけで行動したこと、または、したいことはありましたか。
- Q3 市報で取り上げてほしい内容や企画、広報に関するご意見・ご感想などありましたらお聞かせください。

回答方法

住所、氏名、年齢、アンケートを書いて、ご送付ください。

あて先

〒475-8666
東洋町2-1
企画課
Eメール
kouhou@city.handa.lg.jp



編集後記

今回の表紙は、知多牛です。みなさんは牛の、どの部位が好きですか？私は、ハラミが好きです。食感はやわらかく、脂の甘さもほどよく味わえます。ハラミが、牛のどこの部分の肉か疑問に思い調べてみると、横隔膜の筋肉でした。なんとホルモン(内臓に分類されるそうです。びっくりですね。また、形状がスカートに似ていることから、英語ではアウトサイドスカートと呼ばれるそうです。今度使ってみようと思います。(浅野)